

北海道新聞

2008年(平成20年)2月5日(火曜日)

地域に必要な資料館
専門家と語る講演会
11-14日、史跡巡りも

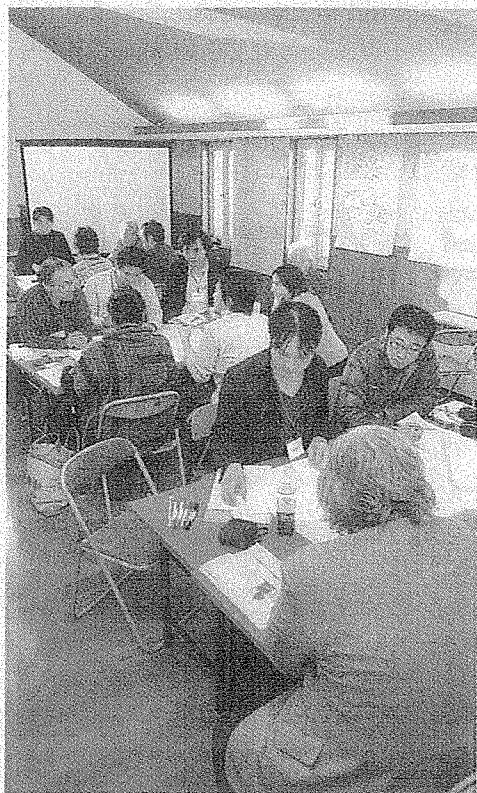
【伊達】「地域にほどの
んな資料館が必要か」を
考える講演会や、市内の
史跡などを巡るバスツア
ーが十一・十四日、市内
で開かれる。

総合研究大学院大学
(神奈川県)の主催。十
一日は、伊達市の文化財
の現状などについて大島
直行・市営火葬文化研究
所長が解説(午後一時
午後五時半)。十二日は
市住んでみたいまちづく
り課などが、移住者増に
よる伊達の変化などにつ
いて語る(同)。

十三日は市内の観光名
所などを巡るバスツアー
(午前十時~午後五時半)
を実施。十四日は、地域
の魅力をふんだんに博物館
と何かについて、国立
歴史民俗博物館(千葉県)
の専門家らが、住民と語
り合うワークショップ
(午前九時~正午)を開
く。
いずれも無料。市外か
らの参加も受け付ける。
申し込みは市営火葬文化
研究所☎0142・21
5050。

文化財まちづくりに活用

【伊達】文化財をまちづくりに生かす研究を行うため、国立大学法人・総合研究大学院大学（神奈川県葉山町）の大学院生十二人が十一日から、市噴火湾文化研究所で四日間のフォーラムを開いている。冒頭伊達豪一十代目当主でもある伊達元成さん（七九）がリーダーで、市民を交えて「地域にとって必要な博物館とは何か」を探っている。



地域にとって必要な博物館のあり方について語り合う学生と市民＝12日・伊達市噴火湾文化研究所

（田村晋一郎）

従来の博物館は「文化財を守る」ことに重きを置いてきたが、今回のフォーラムはまちづくりに活用する道を探るのが狙い。伊達市が、武士集団が開拓した特色ある歴史をもち、移住が盛んで活気があることに加え、伊達さんがかつて市噴火湾文化研究所の学芸員補を務めていた縁もあって、同市が研究の場所に選ばれ

講演、意見交換で道探る

初日は、同研究所の大島直行所長が伊達の文化財などについて講演。国指定史跡の北黄金貢塚で「縄文文化まつり」などが市民主導で催され、地域が文化財をまちづくりに生かそうとしていることを紹介。十一日は市住んでみたいまあづくり課の中沢篤氏、移住コンシェルジエともいわれる吉居大輔氏の講演が行われた。

西口ひも、講演後に市民と大学院生が、地域にとって必要な博物館などについて意見交換を行った。伊達さんは「学生は市民の文化財に対する思い入れの深さに感激している」と言い、十三日は市内の文化財などを視察、十四日午前には仕上げの意見交換会を開く。

神奈川の大学院生 伊達でフォーラム

国の重文など歴史資産200点

【伊達】蝦夷三官寺のひとつ、市内有珠町の善光寺（木立大忍住職）は、国の重要文化財など200種余りの貴重な歴史資産を守り伝えるため、年内にも境内にある収蔵施設・有珠郷土館を建て替えようと取り組んでいます。現施設には空調も無く、文化財保存の大敵である虫食いやカビなどの被害が防げないためだ。（田村晋一郎）

伊達・善光寺お守れ

善光寺は一八〇四年（文化元年）、江戸幕府が正式に建立。そのルーツはさかに千年さかのぼるとされている。

善光寺は一九六五年秋に市が開設。布教のためアイヌ語と日本語の両方を併記した江戸時代の版本「念佛上人子引歌」など約六十点が二〇〇五年、国の重要文化財に指定された。このほか、道場を重要文化財の田空作「観音菩薩」像や

新たな施設は現住地にて、掛け軸や経本に虫食いの痕跡が見つかり、将来的な長期保存には難があるとわかった。また、韓国・南大门の火災のように、放火や防犯対策も課題として

切経の經典の一部を含む約二百点の歴史的資料などが収蔵されている。

しかし、国の重要文化財に指定されたことから保存の質が問われるようになつた。文化庁の調査などによつて、掛け軸や経本に虫食いの痕跡が見つかり、将来的な長期保存には難があるとわかった。また、韓国・南大门の火災のように、放火や防犯対策も課題として

保存環境の整った博物館へ移管する道もあるが、「善光寺の歴史とともに歩んだ文化財は寺にあつこそ価値があり、他の施設へ移すのはあまりに悲しい。また、人の目に触れなくなるのはもったいない」（不立眞理副住職）。そこで、保存や防犯対策に配慮した新施設の建設を目指すことになった。

規模の建物（鉄筋コンクリート平屋、約二百平方メートル）は一億円近くになるとみられ、公的支援や地域の協力を仰ぎたいとしている。

収蔵館建て替え計画

虫食い、カビ、防犯対策も

伊達

歴史を生かし 市民学ぶ場に

博物館像 学生が意見交換

【伊達】文化財をまち
づくりに生かす研究のた
め、市内を訪れている総

合研究生大学院大学の学生
たち十人は十四日、市
噴火湾文化研究所で、市
民十人と博物館の使命、
役割について意見交換し
た。四日間の研究の仕上
げとなるもので、博物館
像について、「歴史を育
てる博物館」など五つの
イメージをまとめた。

「歴史を育てる博物館」



博物館の使命や役割について班ごとに発表しあった大
学院生と市民

2008.2.15 道新

は展示するだけではな
く、歴史を生かし、若者
が参加するという理念。
さらに、土器など「物」
の展示のみならず、それ
を使っていた人やその生
活が浮き彫りになる「ヒ
ストリーテリング」が打ち出された。
リーダーの伊達元成さん(左)は「市民との討議
が有意義だった。今後の
研究に役立てたい」と感謝していた。

(田村晋一郎)

北海道新聞

2008.2.15

研究で故郷を訪れた亘理伊達家20代目当主 伊達 元成さん(29)



意見交換した市民フォーラムの会場で、司会進行を務めた伊達元成さん

一年になります。三年研究する」と論文を書いて申請することができるのでですが、私はあと二年くらい論文を書くのに時間がかかりそうですね。

――総合研究大学院大学 れ歴史や宗教などの専門分野をもつていています」
は私たちにはなじみの薄い野をもつていています」
大学院ですが。

「一九八八年に設立され
た学部を持たない大学院の
みの大学です。学生は主に
国立歴史民俗博物館や国立
民族学博物館で研究活動を
しています。今回訪れたメ
ンバーは日本、韓国、ブル
ガリアの十二人で、それぞ
るも」として語られてき
ましたが、今回は文化財を
まちづくりに生かすのがテ
ーマですね。

【伊達】文化財をまちづくりにどう生かすかを研究するため、十一日から四日間、市内に滞在した総合研究大学院大学の学生たち十二人。リーダーは、武士団による開拓を指揮した亘理伊達家領主・伊達邦成公の子孫、二十代目当主の伊達元成さん(女)。ディスカッションの合間に、市民との交流を通して学ぼうとした狙いや成果を聞いた。

「なんでも話し合いました
れまぜり」和縄で、戦争の
う展示したら良いか、
の戦争体験をどう伝へ
よいか、市民と話しあ
りしました。今回は、
の中はどう地域を伝へ
よいか、住民の皆さん
を伺って学ばせてもら
いと思いました」

——伊達を選ばれたのは、自分の故郷であり、かつて市営火薬文化研究所の学芸員補たつたらでしょうか。

「それもありますが、武士集団が開拓した特異な歴史と、テレビを通じて移住で有名になった伊達がどん

な町か見てみたいと、みんな

なが猛烈に興味をもつたためです」
——今回、一方通行的な
講演にとどまらず、市民と
意見交換しながら研究する
「ワークショップ」に重点
が置かれていますね。
「研究室の中にだけ成果
がどどまらない」と考えました。そのためのオープンス
ペースとして、ワークショ
ップを採用したのです」
——成果はいかがでしょ
う。
「市民との討議 자체が有意義でした。学生たちはこの町はすごい」と盛り上が

していきます

—従来、文化財は「守
た学部を持たない大学院の
みの大学です。学生は主に
国立歴史民俗博物館や国立
民族学博物館で研究活動を
しています。今回訪れたメ
ソバード日本、韓国、ブル
ガリアの十二人で、それぞ
るもの」として語られてき
ましたが、今回は文化財を
まちづくりに生かすのがテ
ーマですね。
「博物館の役目とは何か、
市民の側から考えよう」とみ

――総合研究大学院大学は私たちにはなじみの薄い大學院ですが、れ歴史や宗教などの専門分野をもつています

【伊達】文化財をまちづくりにどう生かすかを研究するため、十一日から四日間、市内に滞在した総合研究大学院大学の学生たち十二人。そのリーダーは、武士団による開拓を指揮した眞理伊達家領主・伊達邦成公の子孫、二十代目当主の伊達元成さん(三七)。ディスカッションの合間に、市民との交流を通して学ぼうとした狙いや成果を聞いた。

んなで話し合いました。——伊達を選ばれたの
は、自分の故郷であり、か
う展示したら良いか、沖縄 つて市唄火文化研究所の
の戦争体験をどう伝えたら 学芸員補だったからでしょ
よい、市民と話しあった うか。
りしました。今回は、日常 「それもありますが、武
の中はどう地域を伝えたら 士集団が開拓した特異な歴
よいか、住民の皆さんのお声 史と、テレビを通じて移住
を伺って学ばせてもらいた で有名になった伊達がどん
へ思ひますか お山が見てえこへんふ

なが猛烈に興味をもつたためです」

——今回、一方通行的な講演にどじまらず、市民と意見交換しながら研究する「ワークショップ」に重点が置かれていますね。

「研究室の中こそ成長意義でした。学生たちはこの日本はどこへ、どこへ盛り上がるか、物館を市民が望むのか、今後的研究に役立てたい。国立歴史民俗博物館や民族学博物館の先生ら来て、こ

がどうまるのではなく、市民に還元したいと考えました。そのためのオープンベースとして、ワークショップを採用したのです」

——成果はいかがでしょう。

「市民との討議自体が有